

第6回教育懇談会議事録

日時：平成25年10月1日（火）15:00～17:00

場所：愛知県三の丸庁舎 アイリスルーム

<大村知事>

本日は、大変お忙しい中、第6回の教育懇談会にご出席いただきまして、ありがとうございます。

また、今回は特別参加という形で、キャリア教育・職業教育の専門家であります名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授の寺田盛紀様にご参加いただきますので、よろしくをお願いいたします。また、もうレギュラーということでございますが、漫画家の江川達也様には、今回もありがとうございます。お忙しいところお時間をいただきまして、重ねて感謝を申し上げます。

前回は、6月に「愛知県公立高等学校入学者選抜制度」と「体罰問題」をテーマに、ご議論いただきました。

高校入試制度につきましては、現在、皆さんからのご意見も踏まえまして、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会議で検討させていただいております。また、随時ご報告をさせていただきたいと思っております。また、体罰問題につきましては、皆さんからのご意見をいただいて、生徒指導の在り方や再発防止に向けての取組に生かさせていただいております。

さて、今日は、「日本一の産業県・愛知を支えるキャリア教育・職業教育のあり方について」でございます。

これは、昔から言われているテーマであります。学校から社会・職業への移行をどういうふうに円滑にしていくのか、そもそもそういうことを考えなくていいのかなど、いろいろこれらもご意見があろうかと思っておりますので、また是非忌憚のないご意見をいただければと思っております。

そういう中で、愛知県は製造品出荷額が36年連続日本一ということで、モノづくり県、まさに産業県であります。また後ほど事務的に説明させていただきますが、非常に職業科が多いのが特徴でございます。それで就職率が高いということも特徴だというふうに思っておりますが、こういったことをどうやって捉え、どういうふうに今後につなげていくかということも課題だと思っております。また、学科改編にもこれからは取り組んでいかなければならない課題だと思っておりますので、またいろいろご意見をいただければと思っております。

また一方で、普通科の生徒が取り組んだインターンシップ等の実施割合が低いことや、

グローバル化、情報化、少子高齢化などいろんな変化もありまして、学科によっては職業学科と職業との関連性が弱まっている、例えば農業高校のあり方をどうするかとか、そういったことも含めて、またご意見をいただければと思います。

本日は、小・中・高等学校段階において、キャリア教育・職業教育をどのように実践していくか、また、地域産業を担う人材をどう育成していくかなどにつきまして、ご意見を伺っていきたいと思います。限られた時間ではありますが、何卒よろしくお願いいたします。

〔事務局から出席者紹介・資料確認〕

<大村知事>

それでは、まずお手元の資料につきまして、事務局から簡潔に説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

<大村知事>

それでは皆様からご意見を伺ってまいりたいと思います。今回は、前半後半2回に分けてまして、前半は、「愛知のキャリア教育・職業教育全般」について、ご意見を伺います。後半は、その中でも、特に「高等学校の職業学科の取組・課題」について、ご意見を伺いたいと思います。

まずは、「愛知のキャリア教育・職業教育全般」について、専門的なテーマでありますので、最初に、寺田先生から、その課題や国の動向を含めて、ご意見を伺いたいと思います。

<名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 寺田盛紀氏>

今、知事から「愛知の」という枕詞が付きまして、私おそらく全然そういう観点が無いんじゃないかと思ひまして、むしろ海外のとか、或いは全国的なというところを踏まえて、何が地方で課題になるかという観点からお話したいと思います。

まず、キャリア教育と職業教育の背景、動向なんですけど、講義的で恐縮ですけど、このルーツは、日本では1996年の就職協定の廃止に伴う問題で、いわば大学から企業に移行するクッションとして、インターンシップなどが導入されたのが直接のきっかけであったということがあります。

初中教育に関しては、ご承知のように1999年、平成11年に、これはどういう角度でキャリア教育が問題になったかと言うと、初等・中等教育と高等教育の接続、つなぎということと、もう一つは、学校教育と就業生活との接続という二つの観点からキャリア

教育が問題になったということがございます。このあたりまではアメリカのモノ真似で、キャリア教育をやっているという構想段階でありましたけれども、平成20年、教育課程の中に、このキャリア教育を位置付けるというふうになってまいります。平成20年の小・中学校の学習指導要領の改訂、或いは21年の高等学校の学習指導要領の改訂では、明確にキャリア教育というものを実施することを促されています。

後ほど触れるかもしれませんが、高等学校段階では、普通科・専門学科を問わず、キャリア教育の特別な教科として、「産業社会と人間」というものを設置することが望ましいということがありまして、教育課程全体の中でキャリア教育を推進していく上で、いろんな教科の中で、特別な教科、進路指導だけではなくて、教育課程全体の中でキャリア教育の観点位置付けて、そこで実施していくということが提案されています。先取りして言えば、ここが実は教育現場ではキャリア教育の一番の課題になっているというふうに申し上げたいと思います。

大学関係では、こういう展開の中で、2010年、平成22年1月に大学設置基準改訂がありまして、これも文科省の中教審の大学教育部会とか、キャリア教育・職業教育特別部会で議論し合いながら、妥協の産物でできたものが、当初は「キャリア教育（職業指導）」と言われていたものなのですが、最終的には大学設置基準改訂を行って、キャリアガイダンスを各大学が実施することを義務づけるという動きになっております。

現在では、大学を含めて初等中等教育、高等教育を一貫してキャリア教育をインターシッパだとか、そういった特別なものだけではなくて、教育課程全体の中で位置付けようという動きになっているという状況でございます。

そのほかに、我が国では、こういったことを後押しする推進力として、ややネガティブではありますが、長く続いた学卒無業であるとか、或いは就職後の早期離職、7・5・3とか、7・5・4とか申しますけれども、こういった傾向、さらに2000年以降になりますとフリーター・ニートの問題が固定化してくる。こういうことに対する対策として出てきたということで、米国、英国とは、ややコンテキストが違っているという面はあるかと思えます。

加えて、キャリア教育と言うと、文科省はいつも職業観・勤労観ということになって、それも大事なんですが、私はそんなものだけではないといつも言っているんですけど、しかし、ここ10年ぐらいずっと諸外国との比較で高校生の職業意識の調査をやっているんですけど、実はこの面でも、本当に思いのほか、日本の高校生、大学生の職業意識は低いというところがあります。もうびっくりしてしまいます。

思い起こせば、出版界で藤原正彦さんの「国家の品格」だとか、「ケータイを持ったサル」を書いた正高さんという人がいらっしゃいます、或いは我が前の同僚でありました速水が「他人を見下す若者たち」という本を書いているわけですが、だいたい2003年から2006年ぐらいまでに集中的にこういった類いの本が出ました。若者論ですね、これは

何を書いているかということ、一言で言うと「公共心の欠如」。私なりに進路だとかキャリアの問題に置き換えて言いますと、職業意識の揺れと言いますか、こういうものが非常に顕著だということがありまして、キャリア教育の背景にあるフリーター・ニート問題に加えて、若者世代のしっかりとした職業意識を作っていくというふうなことが一つの大きな理由になっているということでございます。

本論の今後の課題ということでもありますけれど、3、4点申し上げたいと思います。なかなか2つ、3つに絞ってというのは難しいのですが、1つは、あり体に言えば、今言いましたようにキャリア教育をどう構想していくかということになりますと、小・中・高・大一貫したキャリア教育の体系をどう作っていくか。一貫した体系というのはどういうことかと言うと、生徒・学生が大学を含めていずれの学校段階においても、いずれの選択をしてもどこかで自分のキャリアを作って、その準備をする教育を受けて、就職していくことができる、こういうシステムをきちっと作るということが非常に大事になっているということでもあります。したがって、愛知県においても、是非県大もあるわけですから、大学教育との接続とも含めて本来考えられるべきものだと思います。

2つ目は、ややこしい議論は省略しますが、今回、キャリア教育・職業教育という言葉方をしていますが、文科省の過去数年行われましたキャリア教育・職業教育特別部会、結果として非常にうまく整理をつけたと思っているんですけど、職業教育というものをキャリア教育の中にはめ込んで、全体的な体系だとか、教育のプランとして考えたというところだと思っています。もうちょっと具体的に言いますと、これは私の持論ですけれども、高等学校の職業教育であるとか、或いは大学の専門教育というのは、実は就職前のキャリア教育の最後の完成段階で、キャリア教育の出口というふうに僕は表現しております。そういった観点で、高等学校の職業教育を考えていくべきだろうというふうに思います。一般的な諸々のキャリア・職業に対して準備する、仕事世界に準備するというのがキャリア教育ですけど、文科省の定義は非常に分かりにくいというか、抽象的なんですけど、端的に言えばそういうことです。それに対して、職業教育というのは、専門キャリア、特別の職業だとか、職業群に対して専門的に準備する、そういう教育だと、そういう意味で、共通性があるわけですね。

3つ目ですけれども、先程事務局からも説明がございましたけれども、比較的これまでは気軽な家庭外教育であるとか、或いは総合的学習指導要領の中でも位置付けられておりますので、そういった形で取り組む場合が非常に多かったということですが、やはり諸外国の例などを見ますと、キャリアに関する特別の教科・科目の中で、例えば「産業社会と人間」のようなものの中で、これを実施していく、集中的にやるということが一つですし、加えて、通常の教科の中で、仕事と関連づけたような授業をどう作っていくかということだと思っています。例えば、美術の授業でキャリアマップをデザインさせるとか、これはアメリカの例ですけど、それから英語の授業で通訳者の仕事とかキャリア

についてきとんと触れるとか、おそらく文法や単語ばかり覚えさせる授業だと、とてもそこまでいかないと思うんですけど。高校の数学の積分の授業で、土地調査士の仕事について触れてみるとかということによって、キャリアに見開きができると同時に、それぞれの教科、学習が深まってくると、こういう関係がキャリア教育の役割だろうと思っていますし、このところ文科省だとか、中教審で強調している教育課程におけるキャリア教育というのは、実はそういう意味だと考えております。

4番目が、一般的に言えばインターンシップなんですけれど、先程、職業意識、職業観の問題を申し上げましたけれども、我々の専門言葉で「キャリアモデル」と言います。自分の進路、希望職業を決定していく上で、参考になる、参考にならない場合もあるんですね、一般的には参考になるケースばかり言うんですが、参考にならない人と出会ったからダメかと言うと、決してそうでもないのですが、非常に伝統的な言い方をしますと、甘いも酸っぱいも噛み分ける人間が非常にうまくキャリアを作っていくということだと思っています。しかし、教育機関がやるインターンシップに関しては、やはり職業人との教育的な出会いをうまく組織していく必要があるんだろうと思います。

日本では何でもかんでもインターンシップと呼んでおりますけれど、1日見学に行くものから、2週間ぐらい仕事体験するものまで、或いは大学の工学研究科修士課程だとかになりますと、修士論文だとか、企業の技術開発に関してお手伝いするとか、そういったものまでございます。インターンシップというのは、調べ学習から始まって、仕事一般を知るような経験、最後は特定の職業に就く就かないは別として経験するというところまでいきたいということですね。愛知県の場合、特に中学校段階で3日程度の職場体験ですね、名大の学生もみんなやってきておりますけど、これはなかなか全国的にも誇るべきことだと思っておりますが、次の課題は、先程高等学校でもやっているという報告がございましたけれども、進学校を含めてしっかりとした進路観をもつ上でも、高等学校段階で望ましくは全生徒が受けるくらいのことを考えていただきたい。一例ですけど、ドイツのギムナジウムというエリート普通学校では、中学校で1週間、高校で1週間、必ず行きます。授業が一通り終わった休みの時に、しかも自分で実習先を探します。日本のように学校の先生に全部お世話してもらおうというわけではない。それくらいのことをして、次世代の若者をしっかりと作っていく、能力の面からも、職業意識の面からも作っていくという条件ができるのではないかと思います。

<大村知事>

ありがとうございます。また後ほどご意見をいただきたいと思います。そでは、江口様から順にお願いします。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

私からは2点、お話をしようと思います。1点目はですね、今、寺田先生は、愛知県の話・全国の話・日本の話、世界との比較というお話を頂きましたが、私は愛知県の話をも最初にしようと思います。私は以前、10年弱前に愛知の教育風土についての調査レポートを書いたことがあります。それは、どういうことを書いたかと言いますと、愛知県と言うのは、「手に職志向」ってのが、元々強い。どの位昔に戻るか、どこまで遡ってそう言えるかは分かりませんが、少なくとも、私が中学を卒業した30数年前というのは、そういうものがあつた。つまり、どうしてそういうことが言えるかという、その学校の難易度ということを考えますと、結構、職業科、愛知商業とか東山工業とか、市工芸とか、その辺りの学校の難易度っていうのが、普通科高校、公立普通科の真ん中くらいよりも、ちょい上ぐらいの学校が結構存在していた。で、それは私自身も家業が繊維機械を作っている町工場でしたので、特にそうだったかもしれませんが、結構、中学、いや高校出たら働けという家庭があつたと思います。で、それを支えているのが、中途半端な学歴を手に入れるよりも、スキルを身に付けて社会に出て稼いだ方がいいだろうという風土があつて、中学卒業して料理関係の会社、飲食店に修行に出て働いた人もいたし、学校でも普通の学校に行くのではなくて、トヨタ学園とか企業内の育成の所に行つて、大きな会社にそのまま勤めて、恵まれた処遇で生活されていた人もいました。

その辺を数字で見ますと、全国の場合、2003年の調べですが大学卒・高校卒の生涯賃金格差、大学に行く費用も差引いて、加味しての高卒と大卒の生涯賃金格差ってのを、私が調べたところ、8,500万円、全国であつた。ところが愛知県になると、この差が1,600万円になる。ベースの調査が少し違うので、単純な比較はできないですが、愛知県の場合、高卒で働いた人と大卒で働いた人は、生涯賃金が逆転するのは51歳にならないと、ひっくり返らないと。だから逆に、大卒の賃金が低いのかもしれませんが、その位の差しかない。だったら、よく分かんない大学に行くよりも、早く働いてスキルを身に付けた方がいいというのが、ずっとあつたんじゃないかと思います。

ところがですね、私ここに来る前に、最新の難易度データを見たんですが、職業科のレベルがものすごく下がっちゃつた。私のイメージしているランキングの序列と全然違うものが出てきまして、普通科の下のレベルといいとこ勝負ができるかどうかという感じですね、下がっちゃつた。これは世の中全体が、大学行く人が増えて職業科のレベルが落ちているということがあるかもしれませんが、私は、実は岐阜県民でして、岐阜県なんかは全然そんなことはなくて、商業科の県立岐阜商業とか工業の岐阜工業なんかは、普通科のそこそこのレベルの所にちゃんといつている。その所が、愛知県はどこかその、なんていうか職業科の育て方を間違えた。間違えたと言うと怒られちゃうかもしれませんが、なんか軽んじたんじゃないかなという印象を持っています。ですから、キャリア教育・職業教育の話をする上で、どうやって職業学科、専門学科を出た後に、受験生が喜ぶ、生徒が喜ぶようなことが出てくるかということを考えていかないといけないかな

と思います。

その点で、今回この資料の中で、愛知総合工科高等学校でしたっけ。この試みは、私はすごくいい試みで、成功するといいかなと思います。今、職業科、例えば「ものづくり」をやろうとしている子は、一番上で豊田高専に行けるごく一握りの、すごくレベルの高い子がいて、その後、ガーンと空いて工業高校の一番上になる。その真ん中を埋める所がスコッと抜けてしまっている。しっかりとした産業基盤を作っていくための職業科を考えた場合に、やっぱりレベル感というのは、綺麗な概ねしっかりしたピラミッド状になって、どの階層、学力階層の子も、「モノづくり」の部分でそれぞれの力を発揮して将来に繋げていく、将来を描けないといけないと思います。具体的には多分、岐阜の工業高校と愛知の工業高校の大きな差っていうのが、進学先だと思います。それは頭の良し悪しという事ではなくて、学校の方が大学進学に力を入れているかどうかという所。例えば岐阜工業なんかですと岐大に行く、名城大の理工に行く。普通科高校でも、なかなか入ることが難しいようなところも、ちゃんと行けるようになっている。愛知県の工業高校の行った先は、そういうレベルではないので、そんなこともひとつ考えていかなくちゃいけないのかと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

3点ほど申し上げたいと思いますけども、学生さんというか、子供達を受け入れる企業の立場で申し上げますと、特に職業教育で勉強していらっしゃる、いわゆる専門的な知識だとか、そういったものですが、企業の方ではあまり期待をしていないんですね、正直言って。企業としてはやはり良い生徒さんを受け入れて、企業の中で、いわゆる実践教育、OJTで一人前の技能者、技術者に育てる、こういうことですので。端的に言いますと、中途半端な教育をうけるのであれば、そうではなくて、もっと早く会社に入って頂いて、そこでじっくり育てたい。これが本音なんですね。アンケートなどでは、実践的な知識だとか、っていう回答をするんですが、本音からすると、そうではなくて、一番大事なのは基礎学力です。いわゆる国語ですとか、算数。数学ではないですよ。算数とかですね、端的に言えば、昔の言葉で言えば、読み・書き・そろばんがきちっと、いわゆるちゃんと学校で勉強してきたことが、そのままちゃんとできるっていうことをまず求めているわけです。それはものすごい高度なことではないわけですね。英語でいけば、中学で勉強したことがきちっと身につけていけば、あとはもう実践ですので、それほど難しいことを企業が要求しているわけではないんです。そこが正直言って、非常にレベルが下がっている。工業高校でいけば、愛知県はレベルが低いので、九州ですとか、四国ですとか、そういったところから来て頂いて、技能者としてやっていただいているというのが現状であります。

次に大事なのが企業は学校ではないので、一つ一つ手取足取り教えることはしないわ

けです。やはり教えてもらうという、自分から学びに行くという態度、これはいわゆる企業社会の中で、生きていく一つの知恵ですよ。その中には、マナーだったり、コミュニケーションの力だったり、あるいは、ここで働くという覚悟だったりですね、あるいは礼儀だとか、そういったものが今の子ども達、甘やかされて育った子ども達には欠如しているので、企業に入って全く社会が一変したときに、彼にとってのストレスになって、高校生ですと、愛知県は離職率がちょっと低いのですが、それでもかなりの人がやめていってしまいます。これは学生さんの時点で、社会に出るという覚悟なり、そういった基本的な、俗な言葉で言えば、世渡りの術、生き抜く力というのをつけておかないと企業の中ではやっていけないということですね。

3番目に大事なことなんですが、これは企業側にも問題があるのですが、今までは一つの企業で働けば、本人がやめない限り定年まで一つの仕事で過ごすことができたと思うのですが、最近是非常にグローバル化も進んできて、特に東南アジアを始めとする新興国のレベルが非常に高くなってきています。今、日本で働いている人達の仕事が20年、30年後には多分なくなってしまうことも考えられます。そうすると、10年とか20年単位で新しいことをどんどん吸収していかなければいけない。10年かかって覚えたからと言って、あと定年までこれで食ってくんだということはこれから通用しないわけですね、そうすると絶えず学んでいくという一つの覚悟も必要ですし、ある面でいくと、学校でそういう新しい知識を教えて頂く、これは大学になるのかもしれないですけど、そういう場を作って頂ければ、非常に働く人たちにとっては、自分が苦勞して覚えた技能が陳腐化した時に、新しい技能を更に吸収するという場としては非常に大事だなというふうに思います。ですから職業教育といっても卒業したら、はい終わりと言うことではなくて、10年、20年後にもう一度新しいことを勉強する場というものを、これからは考えていかなければいけないのかなと思っております。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

前半では、少し全体的な事をお話しして、後半で各論をお話しさせて頂きたいと思えます。資料の1ページ目「キャリア教育の全体像」という文科省の中教審の資料だと思うのですが、私はこれを拝見したとたん、これは何年に作られたのかなとちょっと目を疑ってしまいました。今、柴山さんもおっしゃったんですけれども、これから10年、20年を考えたときに、これから日本、および愛知県が何で稼ぎ、何で飯を食っていき雇用人口を確保していくのかというのはすごく大事な視点で、愛知県の産業ビジョン、それに係る人をどう育てていくのかというのは表裏一体だと思うのですよね、この資料にあるキャリア教育については、既存の産業構造、企業の中で、どういうふうに働く能力を養うのかということに焦点があてられてると思うのですが、柴山さんもおっしゃったように、やはり10年先、20年先というのは相当変わってきていると思います。

大学でも留学生は内定長者と言われるくらい、多言語が話せ、両国の文化が分かる、したがって本当にたくさんの企業からの内定をもらっていますが、日本人では内定を取れずに苦しんでいる人達もいっぱいいます。多くの企業がグローバル化をにらみ、やはり国際舞台で活躍できるような人材を求めているんですね。そういう人達は一握りであっても、やはり日本を引っ張るリーダーや創業者をどう作っていくのかということがすごく大事なのではないかと思います。

例えば、今までの産業構造は自動車や自動車部品、この輸出を中心とした産業構造が日本を牽引してきたのですが、これからは内需、インフラ輸出であったり、ファッションとかですね、アニメ、ゲームといったソフト輸出だったり、農業なども競争力を持つかもしれません。内需を拡大しながら、日本の成功モデルを外にどうしていくかということだと思えるのです。日本企業も過去10年ぐらいを見たらですね、やはり国内投資よりも積極的に海外投資をしていますので、いずれは日本から働き口が海外に出ていくのは自明のことだと思えるのです。自動車輸送機械などのグローバル産業が日本企業全体の経常利益の36%を占めていますが、雇用の面では17%なんですね。ですから、こうした今までの輸出産業以外の産業の芽をどういうふうに作っていくのかということ、既存の企業で働くだけではなく、日本で創業する、バイオとかエネルギーとか食料とか、こういうことを創業できる人材をいかに作っていくかだと思います。ですからあまり既存の企業でインターンをするとかですね、どうやって職業能力を育てるかだとか、悪く言えば護送船団だと思えるのですが、この文科省のキャリア教育とは独自路線をいくんだというようなことを愛知でやるべきではないかと思います。

ちょっと前に私、シリコンバレーに行ってきたんですけども、そこはラボ、若い人たちが20人くらいで共同研究をしたり、一緒に生活したりするような住宅があって、スタンフォードをやめた、ハーバードをやめた、MITをやめたという子達がですね、そこで暮らしているんですね、大学よりももっとエキサイティングなことが世の中のためになるその仕事を起業するんだというような、日本の今のインターンシップやキャリア教育では、こういう人達は出てこないですね、高校ぐらいから海外の人材を受け入れて、切磋琢磨できる、日本にいながら他流試合ができるとかですね、日本で非常に優秀な高校生を県が学費と滞在費を出して1年間向こうの大学で学ばせるようなこととか、他流試合をしながら、やはり創業するようなところを支援するというをやっているかないと、私は、既定路線ではなかなか新しい雇用も産まれないと思いますし、日本を引っ張るようなグローバル人材は育っていかないと思います。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

河合塾では偏差値情報、入試情報だけではなくて、高校の先生向け情報誌『Guide line』で、キャリア教育の取組を紹介するということをやってきました。愛知県ではないです

けど、過去2年間の全国的な高等学校を中心とした取組の報告を最初にさせていただき、その中から見えてきた課題を2番目にお話しをし、3番目に感想というか、あるべき未来みたいなことをお話しをしたいと思います。

まず、現状どうなっているかということ、特に進学校でのキャリア教育は未だにあまり熱心とは言えない。愛知県ではないですよ、全国的な状況として。しかし、国の政策、県、地方自治体の政策があって、雰囲気は変わってきていると思います。

では、どういうところが変わってきているかということ、従来の進路指導の活動をキャリア教育の視点に置き換えて、見直しをしています。配布資料の中で「キャリア教育の全体像」というのが1ページに出てくるんですが、「キャリア教育で育成すべき4つの力」に当てはめてきています。例えば、OBや社会人による「講話」ですね。これを「将来の設計」「働くことの意義」すなわち「キャリアプランニング能力」に位置付ける。それから、「オープンキャンパス」「進学講演会」などの進学意識に関するものは、「自己理解」「学ぶことの意義」に位置付けるなどですね。今までやってきたことを整理して、キャリア教育の枠組みの中に入れていくというのが1つ。

それから、寺田先生からもお話しがありましたが、通常の教科、科目の中でキャリア教育的な要素はないのだろうか。例えば、「他者に働きかける力」が「人間関係形成、社会形成能力」として位置づけられています。これは、教科の中で、チーム学習、グループワークをやらせる。これは「自己理解」のなかにある「自分の役割を理解し、前向きに考える力」を育成することにもなる。それから、これは予備校でもやってるんですけど、授業終了後、何を自分は獲得したのかをリフレクション、振り返りをさせる。これは社会で仕事をしていく中で非常に重要な行動です。また、「調べ学習」は「情報収集力」であります。新学習指導要領の「活用」という概念はまさしく「学ぶことの意義」ということになると思います。

では、今までやってきたそのままを置き換えたり、今やっていることを少し意識していけば、キャリア教育になるのではないかというふうに思っているだけかということ、それだけでもない。やっぱり、インターンシップ、職業体験をしたりしています。しかし多くの場合ただやりっ放しっていうのが多く、「で、生徒はどうなったんですか」って聞くと、効果検証をしているケースもありました。仙台市教育委員会が行っている「自分づくり教育」の中学校での取組ですが、2009年度のアンケート結果があります。まず、中学生が職場体験を5日間やります。通常、多くてもだいたい2、3日ですよ。5日間の就業体験をした中学生に「もっと身に付けたいと思う能力は何ですか」と聞いたら「教科の学力」というのが23%で比較的多いんです。でも、それよりも「コミュニケーション力」が28%で多い。学校生活の中では教科の学力っていうのが、やっぱり自分は身に付けたいと思うんだけど、コミュニケーション力をやっぱり1番身に付けたいと思うのは、外に出て、職場体験をしたからではないかと思います。

それから、静岡県の韮山高校で1年生の希望者にインターンシップをやらせたんですけども、その追跡調査をやりますと、東大や京大や国立大学の医学部の合格者の中に、1年生の時にインターンシップを受けた子が多かったという事例。秋田県能代高校では、2年生全員にインターンシップを始めとするキャリア教育をやらせたら、難関大学合格者が増えた事例。もちろん大学合格が目的ではないのですが、インターンシップ、就業体験、職場体験は、通常の教科学力も含めたモチベーションになっているのではないかというふうに予測されます。

つぎに、高等学校の課題を申し上げます。課題は3つぐらいあります。1つは教科学習のなかでの「活用」がうまくすべりだしている教科と、そうでない教科の格差が激しい。また教科間ではなく、「活用」を授業のなかにとりいれている教員とそうでない教員との格差が激しいというのが1つ。

2番目に「文理分け」の早期化。特にトップの進学校ではなくて、その次の高校に多いんですけども、文理分けが早くなっている。文理分けが早ければ受験対策がしやすいというメリットはあるんですけども、教科「情報」や「総合学習」がおざなりになったりするデメリットもある。しかも受験に関係ない科目は適当にしか学ばないという傾向もあります。2年生からはっきり文系と理系にカリキュラムを分けているところが多いんですけど、3年生まで理系でも古典をやらせたり、文系でも微分・積分をやらせたりする高校もある。キャリア教育の視点だけではないんですけども、課題ではないかというふうに思います。

3番目に就業体験の課題です。インターンシップ、職場体験は、相手（企業・役所）があることなので、学校独自ではなんともならない場合があります。よって、1日だけのイベントになったり形だけになりがちなんです。そこで職業観を養うためにいろんなやり方を試行すべきだと思います。社会人を連れてきて話をしてもらってというのも良いんですが、「NHKアーカイブス」っていう会社が「NHKティーチャーズライブラリー」というサービスをやっています。例えば、「プロジェクトX」だとか「プロフェッショナル・仕事の流儀」だとか「仕事発見伝」などいわゆるキャリアにまつわる人気番組をDVDにして、1ヶ月間3本まで無料で貸し出すというサービスです。ほかにも「明日をつかめ」っていうDVDは、3ヶ月無料で貸します。送料700円だけ学校で負担すれば、学内で擬似職業観を醸成することもできます。他にも、iPadを全員に配布すればいろんなやり方が出てくると思います。インターンシップや職場体験に関するところの取組は、ちょっと弱いというのが課題の3番目であります。

最後に感想というか、今のキャリア教育の方向性を考えてみます。今のキャリア教育は、実現性を絞っていくっていうか、情報を自分なりにセレクトしていくという作業なんですけども、実はこれからの社会っていうのは、非常に不確実で、不安定な時代になっていくので、中学や高校で考えた同じ職業があるとも限らないし、働き方も変わって

いくと思うので、その生徒の可能性をどんどん広げていく、萎めていくんじゃなくて広げていくっていうような、そういうキャリア教育が重要じゃないかと思います。

しかし、将来のことは大学に入ってから考えようというように先延ばしをするということではなくて、中学、高校までに自分の将来像を自分で一旦決めることは重要です。将来変わるかもしれないけど、一応仮置きをする作業をしつつ、可能性も絞らない「しなやかさ」が必要だと思います。

今の子ども達はすぐ答えを外に求めるんですよ。「私はどうしたらいいんですか」とか「どうするのがベストなんですか」と答えを外に求めるんですね。受験勉強のように必ず答えはある、森羅万象答えのないものはないと思っています。これは、たぶん大間違いで、答えがないっていうことを体験させたい。そのうちのひとつとしてキャリアもそうなんだ、もし答えがあるとすれば、お前自身が見つかることなんだと指導すべきです。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私は学校教育というような立場から。実は今日の1ページに出ている資料を見て、中教審の2011年に、同じタイトルの「今後の学校教育におけるキャリア教育の在り方」が出ているんです。そこで、先程白石先生がおっしゃったんですけどね、なぜこれを使うかということ、2点あるんですね。1つは学校から社会・職業への移行が円滑に行われていない。これが第1点。それから、もう1点は社会的・職業的自立に向けて様々な課題が見られる。その中で、基礎能力の低下ですね。それから、先程言いました職業意識・職業観の未熟さ。それから進路意識・目的意識が希薄な学生の増加と、まあ、こういう流れの中でこれが出てきている。

私は、キャリア教育とかについて色々と前から学校でお話ししたりする時に、キャリア教育と職業教育はですね、ある時は混在していると。例えば義務教育の段階を考えていた時に、基本的には将来の職業選択ができる基礎的な、ある面の、自分の生きる道であるとかということ学ぶ。私はそれがキャリア教育だと。それはどこで学ぶかということ、教科であるとか、集団活動であるとかという形で、いろんな活動で学んで、今ここで挙げているものを求めようとしているわけですね。ただ義務教育とその後のつながりがうまくいかないというギャップが起きている。うまくつながっていかないと。

例えば最後に「自分らしい生き方の実現・夢の実現」とありますが。夢が持てないといけない、自分らしく生きなさいというなかなか難しいということを言われているわけです。自分らしくっていうのは何ですかって聞いてこられて、これ回答に困っちゃうのですけどね。我々が回答するとき、今私が教師養成をやっています。学生に先生になりたいきっかけはありますかと言うと、例えばどこか小さい頃に教えてもらった先生の影響があるわけです。それから、例えば図工とか図画、美術が好きの人に聞いてみると、小さい頃から絵が好きだったと、すごいそれが好きであったと。例えばですね。ある歌

舞伎役者がラジオ番組に出ていたのですけれど。なんか一般から歌舞伎役者になった人で、4才でテレビを見ていたそうですよ。で、5才の時におばあちゃんに歌舞伎のところに連れてってこれというふうに、で、そこから今女形になっているわけですね。たぶんですね、その小さい頃、そういう興味・関心とそれから自分の好きな教科と科目とのリンクの中で、例えば自分はこういうものは得意、そういうのを学校教育の中で少しずつ養われていく。それで、それが次につながっていくのだらうと思うのですね。

だから、私はいつも言うのです。キャリア教育には確かに今4つの力とあるけど、これはこれらすべてを育てるという問題じゃなくて、例えば、それぞれ好きな教科、あるいは嫌いな教科があるわけです。集団でやる時というのは、一応仲間と一緒にやる。そういうことを、基本的にちゃんとしっかりと身に付けていかないと、その先の、例えば、中学、高校とか大学に行った時の進路に困っちゃうわけです。大学では、今日10月1日は就活の解禁ですよ。また入試センター試験の受付の日です。入試も変わるんですよ。今までみたいに、点数、入試センター試験だけで決めてはだめだということがわかって、面接であるとか、いろんなものを入れていくんだそうです。もっと人間を多様に評価していかないと無理だと。そうすると、それぞれの中に個性があって特徴を作っていく。やっぱり大学側がそういう方針でいけば、下が実は変わってくるわけです。これからどういう人材を育てるかということと、それぞれの発達段階の中でやるべき課題が決まってくる。

私はそういう面で行くと、とにかくですね、夢とかなんか言えるには、出口がはっきりするというのもやはり必要だらうと思うんですよ。先程の職業高校、そこが最終のゴールじゃないわけです。そこから就職する人もいるし、そこから上に行く人もいるわけです。いろんなルートがないとなかなか夢は出てこない、そう思っておりますので。高校に行った時に職業とかそういうのをこれからどうするのかと。私は前から言っていますけれども、できるだけ大学教育と結びつけるのも1つの手ですし、また技能オリンピックで、ああいう形で、すごい技能を磨きたい人は、早くからそういうところに行けるルートであるとか、そういうことをちゃんとできるということ。学校側もそれぞれしっかり把握し、それぞれ義務教育がどういうレベルでどうするかという先生の共通理解と、それから高校に送ったときにどこにどう送るかというようなことを含めて検討しないと、なかなか上の学校との連携がうまくいかないんじゃないかということを思っております。

<漫画家 江川達也氏>

私は、大学に行ってるんですけど、大学に行くところでもない人間になるというのが持論で、大学に行っちゃんと世の中の役に立つことを教えてなくて、プライドだけデカくなるので、愛知県で普通科の学校が少なくて職業学科の学校が多いというのは素晴

らしい選択だと思います。色々皆さんがおっしゃったことに関しては特に異論はないんですけど、私が提案したいのは3点あって、完全に30年後、40年後の世界で仕事ができる人間に必要なものは、昔江戸時代は読み・書き・そろばんだったんですけど、今はとりあえずまずコンピューターが使えないと話にならない。IT化はもう進んでるわけで、発展途上国でもすごい安いコンピューターが配られて、平然とITを使えるようになっていく中で、これを全く教育の中に取り入れてないというのは、もはや何もできない。要するに、英語ができるとか、なんか言葉ができるっていうのは、もうコンピューターが翻訳してくれるようになってきてますから、そう必要なことではないんですよ。要するにコンピューターが使えるか使えないかがまず今後必要です。

だから普通に技能は必要なんですけど、技能を活かすためにはもはやコンピューターがないと話にならないのは、自明の理なわけですよ。だから読み・書き・そろばんの第1点はコンピューターですね。IT化、プログラムを作れたりとか、プログラムを作れなくてもせめて使えるように。私は大学で数学科だったんですけど、卒論がコンピューターだったんですよ。そのおかげで、最近もう一回コンピューターを勉強し直して、最近「iTeacher」という集団があって、ITを使って学校を変えようとする人達がいる、ちょっとフェイスブック友達で親しくしているんですけど、愛知県以外に佐賀県とか色々な県では、もうかなりのコンピューター教育を始めているんで、愛知県も負けていると一気に取り残されるという危機感を感じて欲しいと思います。

第2点は、要するに最近クールジャパンと言われて、漫画・アニメ・ゲームがすごいって話なんですけど、最低全員が漫画を描けるようになるべき、漫画家の立場から言うと。昔は漫画を描くの大変だったんですけど、今はコンピューターのツールができて、漫画・アニメ・ゲームが個人で作れるぐらいのレベルまでできてるんです。なので私も最近「デジタルハリウッド」という専門学校に行って、3DCGを学んでたりするんですよ。実際に漫画を紙っぺらで描く時代は終わって、コンピューターを使って自分で配信して全部一人で映画を作れる時代になってきているので、絵が描けない人でも色々なツールがあるんで、漫画とかを作ることができる。実際に自分で創作していくと、コミュニケーション能力もつくし、実際にプレゼンも必要なわけで、今はパワーポイントとか色々なものを使いながら、高校生でも漫画のように絵とかを利用しながらプレゼンしてるわけなんですよ。その「iTeacher」の集まりで見たのも、高校生が立派なプレゼンをしてました、コンピューターや映像を使ったりして。もはや漫画・アニメ・ゲームみたいなものも小学生のうちから作れるようなカリキュラムを作れば、かなりの人間が作れると思います、漫画家なんて言うておきます。

次に最終的には、逆に漫画とかコンピューターを使っているとサバイバル能力が低下するんですよ。実際に生き抜く力っていうのは、妄想に逃げていくんで、ゲームで仮想現実ばかりに入っていると。ある意味逆に愛知県の保守的な部分っていうんですかね、

自然が多いとか、そういう保守的な部分を活かして例えば山で一週間サバイバルで暮らすとか、そういう原始的な体験っていうのを教育に入れて、この3つのバランスを上手く活用していく、それが新しい読み・書き・そろばんじゃないかな。それができれば、必ず世界に伍していただくだけの能力のある人達が生まれると私は思っています。

<大村知事>

ありがとうございました。まずは一当たりご意見をいただきました。それではまた後半のテーマということで、最初のテーマとも関連いたしますが、高等学校の職業学科の取組と課題を含めてご意見をいただければと思います。

<名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 寺田盛紀氏>

職業学科と表現されていて、いわゆる以前の職業高校の課題に限定されたんですけど、何もそんなふうに限定する必要がないというのが私の見解で、教育委員会なり文科省といつもそこがずれるんですけど、もう少しトータルに職業教育を考えないといけない。今日は大村知事の前なので、思い切って申し上げたいんですけど、やや極論しますと、もし普通科に職業科目をいくらかでも置けば、僕はキャリア教育は必要ないというぐらいに思っています。実はこれが一つ大きな課題、ただ先程申し上げたように「産業社会と人間」とかという自分自身のキャリアをちゃんと考えるという時間をきちっと取るということが全てに必要なんですけど、その上で企業に入ってから、先程柴山さんが学校に何も期待してなくて企業に入ってからちゃんとやりますと言われましたけれども、企業の人材育成というのもかなり最近は大変難しい。それほど以前のように手取り足取りやれないという中で考えると、やはり高等学校なり大学なりで卒業するまでに一定の職業能力をきちっと身につけると。単なるいわゆる基礎力じゃなくて、基礎力は普通科目なり小・中学校でちゃんと付けて下さいよということをお願いしたい。

2番目に申し上げたいのは、やはり大学の専門教育なり、専門教育としての高校職業教育、これは専門性を徹底するということだろうと考えます。この点でもう1つ、普通科における職業科目の導入と同様にもう1つ問題となるのが、総合学科の評価をちゃんとやっておかないといけないということですね。愛知県も11校ありますが、よくやっている方だと思いますが、生徒数でいうと3.8%なので、全国の5.数%いうところから比べると決して高くない。これは専門学科の割合が全国平均より1%程だけ高いということの作用だとは思いますが、その分総合学科に力を入れない。担当者は非常に熱心に取り組んでいるつもりだと思うんですけど、これをどうするかということだろうと思います。私は総合学科の推進に関わりましたが、これはこれで1つの学校パターンとしてあっていいんですが、昔どなたかが6割を総合学科にするんだとおっしゃいましたが、とてもとてもまだ全国で380ぐらい、生徒数で5パーセント、つまり普通科と職業科の

真ん中ぐらいのものをどう評価するかということになるんですが、元に戻りますけれども、端的に言えば普通科の中に職業科目を入れていくということの方が、直接的な職業能力育成の出だしぐらいにはなる。現に全国平均でいうと60数パーセント普通科では、進学校では一切入れてないんですけども、こういうものを置いていると。従って、高校生の前では言いませんけれども、普通の進路多様高の普通科では、こういったことを大いに強調してもいいんだというふうに私は思っております。

問題は専門学科の職業教育なんですけれども、これを歴史的に言うと1978年くらいの学習指導要領からずーっと基礎基本の方向に流れております。僕はこれが間違いの元だと思っていて、現在の学習指導要領を作る時の中教審の部会でも座長として散々言ったんですが、担当者が動かなかつた、非常にチャンスはあったんですがね。専門教育にあてる時間を減らし続けているという問題です。その結果、柴山さんがおっしゃるように中途半端な専門学科になっている。

また外国のことをいいますが、私は諸外国に伍して、ある程度凌駕していかなくやいけない、今非常に危ないということの色んな国をまわって実感しています。とりあえず近辺の中国・韓国の例をあげますと、こういったところではピンポイントで人材育成をしますので、例えば愛知県に何年か前に私を通じて見学にきましたけれども、ロボット学校はないかと。それからこの話は有名で、韓国は日本の金型を皆もって行ってますね、韓国には金型学科っていうのがあるんですよ。金型高校、ロボット高校とか。こういうふうにはっきりとした産業目標を設定した人材育成をやる。長続きはしないという問題はあります。

何が言いたいかというと、中途半端な専門学科じゃなくて、特色のある職業学科を作らないといけない。教育特区というのは、どうも学校経営の問題だけのようなんですが、学習指導要領に縛られないような職業学科を一度作って見たらどうかと。専攻科を2年伸ばすような工科高校を作るようですが、これはこれでまた次の問題があると僕は分かっていますが、今は申し上げませんが。これは一つの方向だと思います。普通科目と専門科目が五分五分とかですね、商業高校にいたっては、7対3でわずか10分の3が専門科目だと。こんなんでもともな職業教育ができるわけがないというのが僕の持論であります。むしろ6割7割ぐらいで徹底すると。そうでないと、普通科との棲み分けができませんし、ずーっといつまで経っても就職市場における大卒者の圧力に負け続けると。専門学科の固有の売りといいますか、これをどう作るかっていうのが大きな課題だというふうに申し上げたいと思います。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

先程2つ話すと言って1つしか話をしませんでした。先程しゃべったことは、このパート、専門学科のほうがふさわしかったですね。つまり、私が前の時に、言いたかつ

たことは、愛知県でやっていた職種校があるので、職業科のレベルアップを意識した施策を行わなければならないと。そういうことで、さっきのテーマに関して、言い洩らしたことがありましたので、一つだけお話ししようと思いますが、インターンシップの話です。私の会社は大垣市にあります。何年か前、地元の中学校の先生からインターンシップのアレンジをやってほしいと依頼がありました。一方、地元大垣の青年会議所の方々が、地域貢献をしなければならないということで、相談があったものですから、じゃあマッチングしようということで、JCのメンバーが経営者として経営している企業で、大垣の公立中学校の中学生のインターンシップを行う。

ただ、子どもたちにぞろぞろと製造現場に来てもらっても危険ですし、保険だとかの問題もあるので、だったら、JCのメンバー自身に学校に行ってもらって、生徒の目の前で和菓子屋だったら和菓子を作り、掃除屋さんなら窓拭きの仕方はこうだと窓をふいてもらう、保険代理店なら保険とはこういうものだよ、というのをやって見せる。各学校に8人ぐらいずつ派遣して、しゃべって実演をしてもらった。

それがものすごく評判が良かった。なぜ良かったかというポイントは、ただ1点、経営者の話が聞けたこと。自分で会社を興し、自分でやっている人達が実際にやっていることを見せてくれて、自分の体験を話す。どうしてこの仕事を始めたのか。何が面白いのか。何がつらいのかを、しゃべりながら実際にやってくれた。インターンシップといえば、職場を見せて終わりとか、少しだけ軽作業をして終わりという感じで、お茶を濁している感じがすごくあります。愛知県の状況は分かりません。日数を取っているのもう少し深くまでやって頂いているのかもしれませんが、先ほど谷口さんが、中途半端なインターンシップよりは、「プロジェクトX」や「仕事の流儀」を見せたほうがインパクトがあるのではないかとおっしゃっていましたが、それは私も同感なんです。やはり高い水準で、意欲を持ってやっている人の話を、直接聞けるということが、聞いたその人自身のその後の職業意識の醸成につながったり、モチベーションにつながる。先ほど、柴山さんが何度も、覚悟を持って、ということをおっしゃっていました。まさにそういうことで、中学生ぐらいというのは、覚悟を持って自分の人生を考えていくタイミングだと思います。ですから、インターンシップの部分に関しても、職業科、高校生ぐらいになってしまうと、自分で意欲を持てば、自分で調べて色々当たっていくことができるんです。だから中学生ぐらいのところのインターンシップに力点を置く必要があると思います。

あと、もう一つ、最後になりますが、職業科については、先ほど白石先生がおっしゃっていたことと少し重複しますが、国際化時代に生きていくためには、外国に留学させる。外国人と一緒に働くということがこの先必ず出てきます。特に、産業県の愛知においてはとても大事になります。そうすると、言葉が片言でも話せるに越したことはないが、それ以上に多文化リテラシー、全く違った姿・形で、全く違った言葉をしゃべる人

達と隣同士でやっていける環境を作っていく。それを高校で、どのような学校のどんな職業科でも、特に愛知県の特徴としてやっていくといいと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

2点申し上げたいと思います。職業学科は商業、工業、農業いろいろありますが、資料を見ていると商業が3分の1ぐらいあるが、産業構造からいっても、いわゆる、商業科の人が目指している事務系の仕事はどんどん縮小しているんです。にも関わらず、商業科がこんなに多くあって、毎年卒業生がこんなに出ている。これではどうしてもミスマッチの原因となるし、生徒が職業を選択する時に希望したところへ行けない。ですから、やはり時代の要請に従って、ある部分は縮小して、これからニーズが生まれるところは拡大していくことをまず考えていただきたい。

それから先程申し上げたように、先生もずっとこの科目で生涯教えていくことが少なくなっていくと思うので、新しい科目にもチャレンジしていただくことにもなると思います。

2番目に、お願いですが、特に職業学科の方は、大学に進学される方もいらっしゃるのですが、卒業すれば企業に就職される。企業側が今どういう状況にあるのか、学校現場の先生方も、もっとよく知っていただきたい。我々から見ると、学校の先生方は、企業現場が今現在どういう状況で、どういうことになっているかということ、あまりよくご存じないように感じる。ですから、できるだけ意見交換なり、情報交換をする場を是非作っていただきたいと思います。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

皆さん多くのことをおっしゃっていただいたので、そこは割愛して、1点目は、こうした職業教育を受けた卒業生の声を分析することがとても重要だと思います。特に、職業学校を卒業して5年目、10年目くらいで学んできた内容が果たして役立っているのかどうか、もっとどのようなことを押さえておけばよかったかという、ユーザーの声を聴いて、そこを分析していくことが大事だと思います。

そして2点目は、やはり、学校の自主努力といいますか、それぞれ魅力ある学校になるような自主性、予算化が必要です。千葉県でも酪農の学校があって、夏休み中に牛の世話をしたりして乳製品を売っている学校がありますが、売り上げは全部県に行ってしまう。そんなおかしなことはないわけで、やはり売って頑張ればそれを学校のために使っていく。

皆さんもご存知かと思いますが、三重県多気町の「高校生レストラン」の学校ではないが、高校生が調理室で料理を作り、おばあちゃんがそれを食べに行く、そういうものは地域の協力があってこそできるものだと思うんです。地域の応援団をどう作っていき、

職業学校をサポートする地域ぐるみの取組も考えていかなければと思います。

先程回覧していただいた「夢を見つけ夢をかなえる航海ノート」あれは実際に使われているのでしょうか。私が子どもなら、あれを書くだけで嫌になってしまうと思います。政策評価をきちんとやって、きちんと利用されているかどうかが大事です。この秋にやられる「全国産業教育フェア」、これだって大人が来てしまったら仕方がないんですね。果たして、学生さんがちゃんと来ているのかどうかとか、フォローすることがとても大事だと思います。

谷口さんもおっしゃっていましたが、既存の資源を利用して、網羅的に世の中にある職業のことを教えていくことがすごく大事だと思います。進路を狭めない、そして途中で修正できることが必要。小学校の女の子で一番人気の職業がパティシエ、男の子は新幹線の運転手だそうなんです。それに全員がなったら恐ろしいことになってしまいますが、途中で軌道修正し、色んな気づきがあったり、自分の進路選択をしていく。そういう職業学科に通いながらも、気が変わった時に大学に進学できる、さらに何年か働いて知識をもって大学に入るなどの仕組みも、ぜひ検討していただきたいと思います。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

私の方からは2点です。寺田先生が冒頭で提起された、いわゆるマイスターの育成をどうしていくのかという問題が1点。日本には、昔は職工とか匠とかいった、ある種リスペクトされる存在があったんですが、こういうことをどうしていくのかという問いだと思っています。これは、今のピラミッド型のモデル、すなわち「末は医者か博士か大臣か」をビジネスモデルとしているところに問題があります。予備校の人間が言うのも変なんですけど、本当の理想は八ヶ岳なんですね。これは文科省も言っているんです。教員の立場が昔から低下しているのも構造的な問題。職業学科が偏差値的な上下でなくて、別のものとして捉えられる教育システムになるべきです。

2点目は、現在の職業学科の課題です。配布資料7ページ目に、「職業学科における実践的な活動」というのがありますが、このねらいは「課題を探求して解決する力」「自ら考え行動して適応していく力」「コミュニケーション能力の育成」です。そうであれば、それを見える化して評価していくことが必要だと思います。経済産業省が言っている「社会人育成力」になっていくんだと思いますが、それをちゃんと評価していくことを本気でやらないといけません。普通科は、こうしたことはまずできないし、評価もできない。これこそが職業学科の特徴だと思うので、「職業学科を卒業した子は違うね。」と企業に評価してもらえる教育の特徴を出さなければいけないと思います。

企業の人に「社会人として必要なものは何か」というアンケートを取っているんですが、「高卒程度、専門学校」出身者に一番期待しているものは、「傾聴力」、「働きかける力」です。「大学卒」に求めているのは、「創造していく」「新しい価値を生む」「課題を

発見して解決していく力」「目標を設定して確実に実行する」という力を求めている。これは高校卒業程度と大学卒業は求める社会人基礎力が違うのだという企業からのメッセージです。そうであるなら、職業学科は、人の話をよく聴いて、チームの中で働くことができる、コミュニケーション力という程度で評価されている現状の人材像を、どうやって職業学科全体で持ち上げていくことが、ピラミッド型になっている今だからこそ、努力をすべき点だと私は思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私は、前から申し上げているんですけども、例えば愛知県のキャリア教育の取組の中に、中学校で進路指導と、普通科の高校でキャリア教育というふうに書いてあるんですね。進路指導のところで、とりあえず大学という傾向もある中で、例えば成績見て工業科にするか普通科にするか考えますが、成績で普通科に決まっちゃうわけです。そういう状況はどうしてかということ、その先のことは見えない面があると思うんですね。

そういう面で行くと、例えば先程の白石先生が「夢を見つけ夢をかなえる航海ノート」について触れました。私はかつて、子ども達に、例えば自分が今やりたいことはどこにあるのか、自分で振り返させた場合がある。今の大学でも、書かせることもやってるんです。なぜこの学科を選んだ、ここを選んだかということと自分の高校、中学校のときの体験を書かせるわけです。それを振り返るということは重要なことだろうと思うんです。だから、そういうことを含めて進路の時にやっぱりはっきりと、工業的なものが好きだったから工業に行くとしたときに、工業に行った後にどういうふうな形で、自分の先が見えるかということ指導の中ではっきりさせないと、なかなか自分らしい生き方まで見えない。夢の実現という、夢を持ってそこにいけるかどうかということです。

特に、高等学校のインターンシップは、職業学科と普通学科では当然、質的に違うんでしょうね。やはり専門的になればなるほど、それらしいインターンシップに取り組んでいるわけで、高校としてのこういう形のインターンシップということ、進路のところで、はっきり示していくべきです。例えば6ページに愛知総合工科高校がありますよね。ここの中に技術スーパーとかそれぞれあります。先程江川さんは大学で学んだことは全然役に立たんと。

<漫画家 江川達也氏>

コンピューターね。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

わかりました。役に立っているものもあると。例えば、右のデュアルシステムのところですが、大学と一方的に矢印になっていますけど、本当を言うと、もっと相互に活用

すればいいと思うんですよ。だからそれぞれ技術者として、或いはそれぞれの求めるレベルと、大学あるいは高校の教育を、どういうふうにマッチングして特色化していくか、そのことをはっきりさせることで学生の選択もちゃんと一応ある程度自分のやりたいことにつながる選択が少しでも可能になってくるんじゃないかと、そんな気持ちであります。

<漫画家 江川達也氏>

世界は黒船でやってきてるのに、槍で闘おうみたいな感じがすごいするんですよ。実際に見てもらわないと多分分からないので、小学生で「Scratch (スクラッチ)」っていう簡単なプログラムをつくるゲームがあって、これができる子は低学年でプログラムを作れるようになってる。実際にやってるんですよ。その時のモチベーションと云ったら、半端なく、嬉々としてやってるんですよ。モチベーションが薄いのは、もう興味が無いことをやらされているから薄いわけで、みんなコンピューター大好きなんですよ、子どもはね。ゲームにいつちゃう人もいるけど、それを利用しないわけにはいかないんで、小学校、中学校、高校、大学、全部コンピューターを導入して教えてる人達がいるんで、そういう人達を呼んで、一度プレゼンを聞けば、今なにが起きてるかってことが分かるので、ぜひ、大村さん、私が紹介しますから、一度呼んで、プレゼン聞いてみてください。それだけ提案しておきます。

<大村知事>

ありがとうございました。ひとあたり意見をいただきましたけど、まだ時間があります。さらにご意見があればということでございますが、いかがでございましょう。寺田先生、よろしいですか。

<名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 寺田盛紀氏>

時間が無いので抽象的な言い方になってしまうんですが、2つくらい具体的にこんなこと、愛知県でできるんですか、やって欲しいですねというのがあります。冒頭に県大の活用って話をしました。これ大学の自治がありますので、所管も違いますから大変難しいと思うんですが、大阪をみればよく分かりますけれども、大胆に大阪は教育学部を作ると、市大と府大を集めてというくらいのことをやっておりますけれど、実際動いているんですよ。県大のなかに例えば、いわゆる高大連携とかいったそういったレベルではなくて、もっと突き進んで、モノづくりコースくらい作れないですか。工業高校なり、商業高校の生徒、しかも先程言いましたけども、学習指導要領よりもっと特化したようなカリキュラムで修了した生徒を受け入れるようなコース、こんなものができるのでしょうか、愛知県版でというのが一つですね。

それからもう一つは、先ほど河合塾の方が、これ実はさっき言いたくて言えなかったことですが、やはり職業科卒の生徒がこんなことができるんですよということをもっと見える化しないといけない。愛知県は実は1982年ぐらいから、資料にも出てますが、職業教育技術認定制度をやっていて、文科省で取り入れられたんです。僕は担当者に直接聞いてますので。そういう先進的なことやっているんです。いかんせんこれはどういう国家資格を取った、校長協会の資格を取ったことを得点化してこれだけできますという話で、具体的にこういう仕事ができるんです、先程あったような基礎力ではこういうことができるんですというのが、残念ながらない。愛知県版の学科別専門別の標準職業能力評価制度みたいなものを作ったらどうか。先ほど経産省のがありました。経産省のは非常に抽象的です。で、僕は前大村知事のご出身の厚労省のジョブカードの職業能力評価システム、あれがいいと思います。僕は今度、大学生の米日韓独の4カ国の職業能力比較調査、今始めているんですけど、あれをかなり使いました。そんなこともお考えになったらどうでしょうかという2つです。

<大村知事>

ありがとうございます。他にいかがでございましょうか。なにかご意見があればいかがでしょうか。先程江川さんが言われたコンピューターを教えたというのは中・高・大全部ですか。

<漫画家 江川達也氏>

全部あります。実際にITだけ教えるわけではなくて、大体、小学校とか中学校で起業している人もいるわけですよ。そういう人達っていうのはやっぱり、大人としても起業してる人は大体ITを使って、それは要するに古いもの、伝統的なものをITを使って紹介するとかね、ただITだけじゃなくてそういうことしてるわけで、愛知県には伝統的な素晴らしいものがあるんで、それにITというツールを加えれば十分に競争力が生まれると思います。

<大村知事>

大学生はね、好きな子はどんどん、どんどんね。

<漫画家 江川達也氏>

いや、ただね、大学でも、語学を教えるのに、iPadを使って、要するにドイツ語なんかでも自分たちで、寸劇じゃないけどドイツ語でしゃべるような映画を作って発表したりとか、ツールもあって、ドイツ語をちゃんと発音しないと理解してくれないようなツールがあって、それを使うと、どんどんどんどんドイツ語の発音ができるようにな

るという実証例があって、多分その人を呼んできて見ていただければびっくりするんですよ。もう見違えるほど上達が違うんですよ。で、実際それをやってる先生方が草の根的にいるんで、一度呼んでプレゼン聞くだけでも多分相当価値観が変わると思います。

<大村知事>

江川さん自身の普段の仕事はあれでしょう、ITとか、デジタルじゃなくて、やっぱりアナログの世界じゃないの。

<漫画家 江川達也氏>

僕はITに移行するつもりで3DCGをやったり、マンガは10年くらい前からコンピューターで描いています。

<大村知事>

あっ、そうですか。

<漫画家 江川達也氏>

コンピューターに。手で描いてる人は少ないぐらいで、今そういう形になってて、あとはマンガもデジタルで出してくるし、あとは3DCGの方向に移行してるし、あとは医療に関しても3Dプリンターができたんでそれで実際に臓器を作って手術の試験やってるっていう医学部の先生とかも知り合いですし、あとは、全ての救急車とかドクターヘリに全部にiPadを導入したっていう佐賀の役所の人とも知り合いになったんですよ。

だから本当に実例を本人が来てプレゼンするとびっくりするようなことが今、世の中では起こってるんだけど、愛知県は悲しいことにちょっと遅れてる感があるなど、相当遅れてます。佐賀ですごい進んでるんですよ。佐賀の役所の人と結構やり取りはしてます。

<大村知事>

医療はね、もうCGでね、コンピューターの塊ですけど。

<漫画家 江川達也氏>

ただ、医療も一番先端の人がいて、本当その人の臓器を立体で作るんですよ。

<大村知事>

いやいや、ありますよ。どんどん入れてますよ。

<漫画家 江川達也氏>

見ました？入れていますか。ならいいんです。

<大村知事>

この辺、大学病院あるから、競ってますからね、そういうところ。

<漫画家 江川達也氏>

もっとIT利用した実例のプレゼンをどんどんこう呼んで、IT方向に活性化すべきだと私は思います。

<大村知事>

この間やってたスタジオジブリの宮崎監督なんて一生懸命全部描いてるんですよ。

<漫画家 江川達也氏>

違うんですよ。あれは全部描いてるんじゃないくて、ある一部雲の描写とかは、もう「デジタルハリウッド」の卒業生のCGの人がCGを作って。だからCG使っている部分はCGに変えて、だから世の中って相当進んでるんで、やっぱ早く導入しないと、ちょっと遅れちゃう感じがするんで。それでもまだまだ全国的にはダメなんです、反対が多くて。

<大村知事>

それは全く同感ですけどね、私も。

<漫画家 江川達也氏>

なんで、もっともっとそのデジタル化の方向にも、あとはそのバランスとして、伝統的なものと最先端というのをバランスよく進めていくことがすごく大事だと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。今日はですね、キャリア教育・職業教育ということについて、そしてまた愛知県の職業学科のあり方について、忌憚のないご意見をいただきました。ありがとうございました。小・中・高・大、それぞれで取組を進めておりますけれども、確かに時代とともに、そのニーズも変わってきますので、その点については、常にそういった流れに合わせてといいますか、そういったことを踏まえた対応をやっていかないといけないと思っておりますし、やはり地域の産業との連携、それから高校と大学

との連携、そういったことも含めてこれからもしっかりとまた取り組んでいきたいと思
います。

今日いただきましたご意見はまとめまして今後の私どもの取組に反映をさせていけれ
ばというふうに思っております。今日は貴重なお時間をいただきましてありがとうござ
いました。またこの教育懇談会は続けていきますので、引き続きよろしくお願いいたし
ます。今日は本当にありがとうございました。

以 上